

フェミニズムと精神分析、およびスピヴァクにおける女性器切除について

中村 彩 (リヨン第2大学)

私は現在文学部でボーヴォワールや彼女と同世代の女性作家について研究しているので、哲学というよりは文学を扱っていますが、『抹消された快楽』は大変面白く読みました。特に(『差異の変換』でもおっしゃっていますが)「女性」は女性が被る暴力によってしか定義できないとしても、「女性的なもの」は女性を「超越し」「脱自然化する」(日本語訳、168頁)、フェミニズムから女性的なものを簡単に取り除いてしまうことはできない、という本書の主張はとても重要なものだと感じました。

本書では第8章でボーヴォワールの『第二の性』が取り上げられています。ここであなたは「『第二の性』はなお、女の快楽の二重の特徴につまづいている。[...] クリトリスの快楽が消え去る必要はないとしても、[...] クリトリスが真に開花するのはあくまでもヴァギナの快楽との関係においてではない。結局、クリトリスはヴァギナの快楽に優先権を与えなければならないのだ」(61頁)と述べていますが、同時にボーヴォワールの「政治的な前進と女の解剖学的構造のとらえ方のあいだにはギャップのようなものがある」ともおっしゃっていて、その通りだと思います。これはミシェル・ル・ドゥッフがボーヴォワールの「不適當さの天才 (génie d'inadéquation)」(Michèle Le Dœuff, *L'Étude et le rouet. Des femmes, de la philosophie, etc.*, Paris, Seuil, 2008 [1989], p. 65) と呼んだもの、フロイトやヘレーネ・ドイチュのような権威ある人の理論を借りながらも自分の議論に合わせて流用するという傾向とも言えるでしょう。

ボーヴォワールがヴァギナの快楽の優位を否定しているということは、『第二の性』のレズビアンに関する章ではっきりと表れていると思います。このレズビアンの章については本書冒頭(1章)の注で簡単に言及されるにとどまっていますが、ここでボーヴォワールはこう述べています。

フロイトによれば、女の性愛の成熟にはクリトリス段階からヴァギナ段階への移行が不可欠であり、[...] 同性愛は未完成なものとして現れている。だが実際には、同性愛の女は「できそこないの」女ではないし、同じように「高等な」女でもない。[...] 同性愛は女にとって、自分の条件を回避する手段となることもあれば、自分の条件を引き受ける手段となることもある。精神分析学者の大きな誤りは、教化的な順応主義によって、結局は同性愛を非本来的な態度としてしか考察していないことである。(Simone de Beauvoir, *Le Deuxième Sexe II*, Paris, Gallimard, Folio, 1976, p. 192-193. シモーヌ・ド・ボーヴォワール『第二の性』II巻(上)、『第二の性』を原文で読み直す会、新潮社、新潮文庫、2001年、272-273頁。)

ボーヴォワールはこうしたレズビアンの擁護の中で、精神分析を批判しつつ、ヴァギナの快楽への移行を前提としないクリトリスの快楽を擁護していると言えます。

この引用に関連してお伺いしたいのは、あなたはフェミニストとして、どのように精神分析との関

係をとらえているのか、ということです。理論の領域では精神分析がセクシュアリティやジェンダーについて考える際に重要な視座を提供するものであることは言うまでもありませんが、実践の上では、精神分析家と、フェミニストやクィア理論の論者の間には今でも時としてかなりの政治的な緊張関係があるように思われます。2013 年の同性婚合法化に対し一部の精神分析家から反対があったことや、『抹消された快楽』でも引用されているポール・B・プレシアドの『私はあなたに語りかける怪物である』(Paul B. Preciado, *Je suis un monstre qui vous parle. Rapport pour une académie de psychanalystes*, Paris, Grasset, 2020) がそのことを示しています。こうした中でフェミニズムと精神分析はどのように折り合いをつけることができると思われますか。

次の質問に移ります。本書 10 章、11 章における女性器切除に関する議論は、私にとってはガヤトリ・スピヴァクの議論を想起させるものでした。スピヴァクは 1981 年の論文「国際的枠組みにおけるフレンチ・フェミニズム (French Feminism in an International Frame)」において、いわゆるフレンチ・フェミニズムの論者たちの西洋中心主義を批判しつつ、西洋の女性たちの直面する問題と第三世界の女性たちのそれとを考えるために「象徴的なクリトリス切除 (symbolic clitoridectomy)」という概念を提示しています。彼女によれば、クリトリス切除があまり行われていないような西洋諸国でも、象徴的なクリトリス切除は行われていると言うことができ、それは女性を主体としてではなく「性的対象あるいは再生産の手段や媒介として定義すること」にかかわっています。またスピヴァクは、私たちはクリトリスを主張することはできるかもしれないが、子宮を中心とした社会のあり方があるということをおぼろげに忘れることはできない、とも述べています。

私たちはクリトリスの過剰性を求めながらも、再生産に関する定義との対称性を完全に逃れることはできない。子宮的社会編成とでも呼ぶべきもの（未来世代の再生産に関する世界の配置のこと。そこでは子宮が生産の主たる動因であり手段である）を帳消しにして、クリトリス的なそれを選ぶことはできない。子宮的社会編成はそれよりも、それ自体がクリトリス的社会編成を排することによってこれまで成り立ってきたということの理解を通して「位置づけられる」べきである。[...] クリトリスの抹消に関する探究——そこではクリトリス切除は、「再生産の法的な主体としての客体」としての女性の定義の換喩である——は、根気強く子宮的社会編成を脱規範化しようとするものである。(Gayatri Chakravorty Spivak, “French Feminism in an International Frame,” *Yale French Studies*, n° 62, 1981, p. 183.)

このようにスピヴァクには、西洋の女性と第三世界の女性をつなぎ、クリトリスとヴァギナ、子宮をつなごうとする努力、あなたの言葉を借りればクリトリスと「隔たり」を考えようとする努力が見られるように思われます。今回のご著書ではスピヴァクは引かれていませんが、あなたの 10 章、11 章の議論はスピヴァクの議論に近いものと思います。この比較についてどのようにお考えでしょうか(あるいは相違はどのあたりにあるでしょうか)。